

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<p>本校の教育テーマ「環境教育」「国際理解教育」「表現活動」を相互に関連づけて推進し、グローバルな視野と主体的に生きる力を有する生徒を育成する</p>	<p>■ICTの活用や公開授業の回数を増やして授業改善に努めた。ICT活用は生徒の学習意欲を刺激しているが、家庭学習の時間数の増加にはつながっていない。生徒の学習意欲向上につながる授業改善を進める必要がある。</p> <p>■国公立大学の合格状況は少し改善したが、所謂中堅の私立大学の合格状況は厳しい結果であった。入学時から学習習慣の定着の指導に力を入れ、学力向上を図る必要がある。就職は100%の予定を得ることができた。</p> <p>■「環境教育」「国際理解教育」「表現活動」の関連性を高めた取組を「総合的な学習の時間」を使って実施することができた。生徒の生活委員による環境保全活動の取組と教職員によるKES認証の更新とともに継続することができた。</p> <p>■広報は、ツイッターやホームページ、毎月のお知らせマガジンの発行により積極的に展開できた。学校説明会も在校生のプレゼン等により中学生に親近感を持たせることができた。</p> <p>■部活動指導は、日々の指導に加え、部集を定期的に開いて人間性と社会性の育成、目標に向け努力する気持ちを大事にする指導に努めた。</p> <p>■京都府自転車安全利用推進員は取組3年で800人を超える生徒が受講し、京都府より「自転車安全利用取組優良モデル校」の認定を受け、鍵1グランプリにおいても第1位の表彰を受けることができたが、自転車の安全運転については継続してさら注意喚起を図る必要がある。</p>	<p>【目標】 希望進路が実現できるよう学力を向上させる。特別活動と部活動の充実を図ることで自主性と社会性、規範意識を養う。地域の学校として愛され信頼される学校づくりを行い、3つの教育テーマ「国際理解教育」「環境教育」「表現活動」を相互に関連させた教育活動を充実させる。</p> <p>【項目】 1 学習指導 (1)新学習指導要領の改訂ポイントを踏まえ、各教科で「何ができるようになるか」を明確化し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の研究と実践を行う。 (2)教員相互の授業参観を行うことで資質能力の向上を図るとともに生徒の学力向上につなげる。 (3)生徒の学習意欲を高め理解を深めさせるために、ICTを活用した授業の開発に取り組む。 2 進路指導と生徒指導 (1)希望進路の実現に向け、一人ひとりに応じたキャリア教育を推進する。 (2)北稜祭等の活動を通して生徒の自主性を養う。 (3)挨拶や身だしなみ、言葉遣いの指導に力を入れ規範意識を醸成する。 3 部活動指導 (1)学習と部活動を両立させる指導に力を入れる。 (2)部活動員に学校生活のリーダーとしての自覚をさせ、あらゆる活動に意欲的に取り組ませる。 4 魅力ある学校づくりと情報発信 (1)生徒が協働して課題解決型学習に取り組み、自ら考えたことを校外に発信する機会を設ける。 (2)学校の日常の取組が保護者や地域によりよく分かるように、ホームページやツイッターをさらに充実させる。 5 地域との連携 (1)近隣の大学や研究機関、小・中学校と学習や文化、スポーツの交流を行い連携の強化を図る。 □</p>

評価領域	重点目標	具体的方策	評価基準	評価		進捗状況(成果と課題)
				項目	総合	
第1学年部	基本的な生活習慣を確立する	・挨拶をしつかりする、服装や髪型を正しく整える、時間や社会・家庭・学校のルールをしっかりと守るなど基本的な生活習慣を確立できるようホームルームや学年集会などで常に働きかける。	・基本的な礼儀作法、規範意識は身についたか。	B	B	規範意識を持ち、落ち着いた学校生活を送っている生徒が大半であるが、携帯の不適切な使用や、朝の遅刻など課題のある生徒も見られる。家庭学習も充分とはいえないため、2年生に向けて引き続き指導していきたい。
	主体的に学ぶ姿勢を身に付けさせる。	・2020年度入試に向けて「振り返りシート」を持たせ、活動履歴を蓄積する。 ・進路部と協力し、どのような学問学科があるのかを考えさせる。	・振り返りシートは活用できたか。 ・どのような学部・学科があるのか知り、自分の興味のある分野を見つけることができたか。	B		進路指導部の協力を得て、様々な切り口で生徒の進路に対する意識を高める取り組みを行うことができた。また、LHRで何度か時間を確保し、Japan e-portfolioへの入力も進んでいる。
第2学年部	基本的な生活習慣の確立と基本的な礼儀作法の定着を図る	・遅刻や無断欠席をさせないよう、生徒や保護者に常に働きかける。 ・挨拶、身だしなみ、言葉遣い、話を聞く態度等、社会で生きていくために必要な規範意識を身に付けさせる。	・朝の遅刻指導の数を昨年度よりも減らすことができたか。 ・基本的な礼儀作法や規範意識が身についたか。	C	B	学年集会の際などに話をしている人の顔をしっかりと見て話を聞いたり、部活動員を中心に挨拶をしたりなど、一定の規範意識は備わってきている。その反面、集中して授業を受けることができなかったり、遅刻を繰り返したりする生徒が一定数存在した。3年生になったときに気を引き締めて生活できるよう残り時間、指導をしていく。
	学習習慣の定着と学力の伸長を図る。	・学習記録表を付け、自らの学習状況を把握して家庭学習に意識を向ける。 ・早い段階で進路目標を設定し、自分の目標に向かって必要な学力を身に付けられるよう面談やHRを活用する。	・家庭学習時間が増加したか。 ・生徒の学力が伸長したか。	B		定期考査等を目指して学習する習慣を身に付けた生徒が少しずつ増えてきているが、定期考査前でも学習に意識を向けられない生徒もおり、二極化が進んでいる。進路HRなどを通して、自分の進路を見つめなおす機会を設け、学習に向かう姿勢をはぐくみたい。
第3学年部	生活習慣の確立と授業規律の確保	・自らを律し、周囲に気を配って社会でも立派に通用する言動ができるよう指導する。 ・教科担当と情報を共有し、課題がある生徒への指導(家庭連絡含む)を素早く行う。また、度重なる者については学年全体で指導を行う。	・遅刻回数回の生徒数1週間10名以下。 ・授業規律違反生徒期間内10名以下。	B	B	・秋までは限定的であった遅刻者が秋以降はクラスによって大幅に増え、十分な指導ができなかった。 ・初期指導によって授業規律違反者数を抑え、教室全体の雰囲気を保つことができた。
	生涯にわたって学び続ける姿勢の育成	・進路目標達成に向けて課題や補習に取り組みさせ、粘り強く努力させる。 ・時代に生きる者として学びの意味を理解させ、受験勉強にとどまらぬことのない学びへの姿勢を身につけさせる。	・進路目標(5月時)が80%以上達成できたか。 ・学びの意味を理解し、学習時間を3時間以上維持できたか。	B		・進路目標の達成は77.4%であったが、少なからぬ生徒が学び続ける姿勢を身につけた。

国語科	生徒の学習意欲を高め、しっかりとした家庭学習を確立させる。	・予習や復習のきめ細かな指示と確認、小テストの定期的実施を行う。 ・定番教材の指導方法を見直し、生徒が主体的に参加できる授業形態をさらに工夫する。	進路部実施による家庭学習時間調査において、国語が週3時間以上になるようにする。	C	B	・3年生の一部のクラスで1週間の国語の平均学習時間が3時間を超えたが、学習時間が不十分であるクラスが多くあった。今まで以上にきめ細やかな指導が必要である。 ・授業形態の工夫については各教科担当者間で情報交換を行い、更なる改善に取り組んだ。
	多様なそして多数の語彙を習得させ、豊かな世界観を育成させる。	・文法体系だけでなく、類義語や対義語などの横の広がり、語源などの縦のつながりなど、いわば言葉のネットワークを意識させる。 ・ブックレビューの作成など、読書を喚起させる工夫を各小科目担当で協議し実施する。	読書指導に特化した授業を1・2年生でそれぞれ2時間以上実施する。	B		1年生の北稜エッセイI・2年生の北稜エッセイIIにおいてブックレビューカードの作成を実施し、1年生の作品については図書部の協力で図書館内でのカードの掲示や「読書のすすめ」への掲載を実施することができた。
地歴・公民科	各科目を通じて「国際教育」「環境教育」「主権者教育」の視点を踏まえた授業展開を心がける。	グローバルな歴史認識の下、同時代の世界、周辺諸国の動向に注目しながらの授業展開を工夫するとともに地域社会との関わり方なかで、主権者意識を育てる。	絶えず現代世界の動向を見据えながら授業展開できたか。俯瞰的な視点で事象の因果関係を説明できたか。主題学習やレポート作成などを通じて主権者意識を深めることができたか。	A	A	エッセイ総合社会で「地域のために何が出来るか」をテーマに、SDGsの視点でフィールドワークを含めた学習を行い、その調査・研究・実践の成果を地域の協力者や研究者を招き、2、3学年合同の場で発表会を行った。また主権者学習と連動させ、生徒達に最も有益なものを投票させ、その発表が身近なものになるように意識した。来年度以降の探究学習につなげた。
	生徒の実態に合わせた「わかりやすい授業」の教材開発に取り組む。	すべての科目において、学習内容の精選を行うとともに生徒の視点に合わせた教材開発(視聴覚教材 ICT)を心がける。その際、時事問題や地域の課題などの教材開発、展開を心がける。	教授内容の精選ができたか。新資料や視聴覚教材をタイムリーに提供できたか。レポート、討論など諸場面で活用できたか。	A		現代社会、政治経済、地理の授業で国税局の「税の作文」やJICAの「国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト」に応募し、それぞれ左京税務署長賞、学校賞を受賞した。
数学科	新テストに対応した授業展開を研究する	・思考力・表現力・判断力を伸ばす授業展開を教科会で検討し、実践する。主体的対話的で深い学びになるような課題学習を学期に一度を目途に取り入れる。	教科会議で授業改善の研究を行えたか。	B	B	2年生の課題学習を今年度より導入した。1年生の課題学習は1学期、2学期と複数回実施した。学力の3要素を評価できるような考査問題を作り、ルーブリック評価が行えるような仕組みも整えている。
	家庭学習の習慣を身に付けさせ学力の向上を目指す	・家庭学習を定着させるために、定期的に課題を課し、小テストを実施する。 ・成績伸長のために補習、土曜講座、朝学習で模試や入試に対応した問題に取り組む。	・生徒が提出物や小テストに取り組んだか。 ・各学年で実施される府立高校実力テスト、進研模試の成績を伸ばすことができたか。	B		各学年の各講座で小テストは定期的に行え、再テスト指導、補充指導も行っている。進研模試では、2年生のSAとA、1年生のSAクラスで平均偏差値の上昇が見られた。
理科	自然現象への興味・関心を持たせ、授業への集中力を高める。	身近な自然現象を授業で積極的に扱ったり、演示実験、模型、ICT機器を活用したりして、興味関心を持たせ授業に集中させる授業改善を行う。エッセイIIについては、地球研などの専門機関と連携し、地球環境問題に関する知識を習得し、テーマを発見する能力や学んだ内容を発表する能力を養う。	自然現象に興味をもてるように授業改善ができたか。提出したレポート課題や授業アンケートの結果を踏まえて検証する。	A	B	演示実験、ICT機器や模型を積極的に活用し、生徒が自然現象に興味を持ち、理解が深められるように授業改善を行った。北稜エッセイでは2年2講座、3年1講座が開講され、地球研などの外部の機関と連携するなどして、地球環境問題や地域の自然についての専門的な講義や実習を行った。各講座では年度末に小学生との学習交流会や校内発表会をもち、1年間学んだことや相手に伝えることを通して、思考力や表現力を高めることができた。
	日常の学習習慣を確立させ、成績不振を招かない丁寧な個別指導を行う。	学習習慣の確立のため、課題プリント、実験・実習レポート等を定期的に提出させてチェックし、小テストも行う。それらを評価に加味する。必要に応じて学力に課題のある生徒に対する考査前補充を行う。	学習習慣を確立できるように課題や小テストを課すことができたか。課題や小テストの達成率が80%を超えることができたか。	B		学習習慣を確立させるために単元毎に問題集などの課題を出し、チェックを行った。また、定期的な小テストを行い、理解度をチェックした。課題の提出状況は概ね80%を超えていたが、小テストの得点や課題の取り組み内容は不十分な時もあり、さらにきめ細かな指導が必要である。
保健体育科	生徒の意欲を高める授業内容の実施	選択制授業の幅を広げ、生徒の意欲向上に努める。	授業への出席率及び参加率95%、担当教員への課題期限内提出率100%及び課題点検回数2回以上	B	B	各学年で種目の選択をさせることで、自ら進んで取り組むことができたが、回数が多いと継続しての参加を持続させるのが難しかった。提出課題については、期限内での100%には至らなかった。
	安全な授業進行の徹底	日々の施設点検及び授業前の生徒を含めた安全点検を行う。	単元開始前での体育科教員全員による施設用具点検100%及び毎時間の生徒準備時の点検100%	B		概ね、担当教員が授業前に点検を行うが、生徒による点検を毎時間するまでには至らなかった。
芸術科	芸術の幅広い活動を通して、感性を高め、芸術の諸能力を伸ばす授業を目指す。	生徒に目標の設定と振り返りをさせることにより、芸術における諸能力が高まったかどうかを評価させる。 グループ学習や発表を積極的に取り入れることで、言語活動の充実を図る。	芸術の感性が高まり、諸能力が伸びたと感じた生徒が70%を超えるかどうか。 各学期ごとにグループ学習や発表を取り入れ、言語活動の充実が図れたか。	A	B	授業評価アンケートにより授業が技能を高めるのに役立っていると感じている生徒は92%となった。また、課題ごとのアンケートを一部の授業で行い、諸能力が伸びたと回答した生徒は86%となった。今後、課題による生徒の満足度を比較し、改善策を探していきたい。 今年度グループ学習を積極的に取り入れ、言語活動の充実をはかることができた。発表については一部の授業では充実したものとすることができたが、まだ、不十分な授業も有り、引き続き言語活動の充実、発展に取り組むたい。
	「国際理解教育」の中心的な教科としての自覚を持ち、生徒の学習意欲を高め学力を向上させる。	家庭学習を習慣づける。具体的には、小テストを毎週実施したり、予習復習を詳しく指示し点検する。 全体として英語検定受験者数を増やす。2年終了時まで、文理コースの生徒は準2級、英語コースの生徒は2級取得を目指すよう受験を勧める。GTECについても意欲・目標を持って取り組むよう指導する。英語コースについては「アクティブイングリッシュ」「北稜エッセイ」の授業を通してGTECや英語検定の問題演習を行う。	各小テストの合格率70%、提出物の提出率100%を目指す。 英語検定受験者20%増を目指す。英語コース2年終了時の準2級取得率80%、2級取得率30%を目指す。 GTECについては、各学年とも1年後にはコース平均を総合コース30点、文理英語コース60点アップを目指す。	B B		小テストの実施や提出物の点検についてはどの講座でも行ったが、評価基準の70%合格・100%提出には及ばない。小テストへの積極的な受験をさらに日頃から促す必要がある。また、最後までどうしても提出物の出せない生徒が増えてきているので、全員が提出物を出せるようにその対策を考えなければならない。 Activeを中心に資格取得を目指した授業内容も展開しているが、なかなか結果に結びつかない。 英検受験者数は昨年度とほぼ同じであった。特に英語コースについては、3年の準2級取得者が40%、2年が約30%にとどまっている。費用や部活動との兼ね合いもあるが、今後も基礎力の定着を授業で図るとともに積極的に受けるよう働きかけていく。 GTECについては基礎コース10点、文理英語コース50～60点アップした。その結果より、やはり総合コースの基礎力による定着をさらに図る必要があると考えた。
家庭科	1人の生活者として自立させる。	実習を通して、食生活や消費者問題を中心に自立して生活することを考える。	献立でや実習レポートを作成することで、バランスのとれた献立で作成ができるか消費者としての意識が確立できているかを確認する。	C	B	選択科目で調理技術については、9割以上の生徒が上達したと答えており、食物を大切に作る気持ちも芽生えているが、バランスのとれた献立で作成にまでは行き着かない生徒もいた。
	共生について考える	NIE学習等を取り入れ、乳幼児、高齢者、障がい者との共生について考える。	単元の終わりにレポート作成や、グループ学習で各課題に対してどのように考えるかを確認する。	B		高齢社会の現状と課題をNIEや視覚教材を用いて認識し、考えさせることができた。また、保育園実習を通して乳幼児との共生を一定考えさせることができた。
情報科	教室にとどまらず、社会に目を向ける授業を心がける。	実社会で起こっている最新の問題を例示しながら授業を進める。 個別的なPC利用の修得を目指す。	情報社会の光と影について十分理解し、正しい表現・発信ができること。 キーボード操作が上達すること。	B	B	情報社会における法と倫理について年度の前半に行い、関連した事例は年間を通して例示した。キーボード操作は年間を通して毎時行うことができ、かなり上達した。簡単なWebページの作成をしながら正しい表現・発信の練習を行うことができた。